

「世界史の構造」→「力と交換様式」 柄谷行人

## 本の概要

1970年代後半から文芸批評家として活躍し、90年代後半からはマルクスやカント、ホッブスの読解から「交換」に着目した理論で社会や歴史を読み解いてきた柄谷行人さん。

その集大成ともいえる『力と交換様式』では、社会システムを

A=贈与と返礼の互酬、

B=支配と保護による略取と再分配、

C=貨幣と商品による商品交換、

D=高次元でのAの回復

という4つの交換様式によって捉え、とりわけ資本主義=ネーション=国家を揚棄する、人間の意思を超えた「D」の到来をめぐって思考を深めた。

「Aの回復としてのDは必ず到来する」。

民主主義と資本主義が行き詰まりを見せる混迷の危機の時代、

絶望的な未来に希望はどう宿るのか。

その輪郭はどのように素描可能か。

『トランスクリティーク』『世界史の構造』、そして『力と交換様式』を貫く「交換様式」の思考の源泉に迫る。

---

## 『世界史の構造』 柄谷行人 著

柄谷氏は、氏族社会、古代国家、世界帝国、普遍宗教、近代国家、産業資本、グローバルゼーションへと世界史の流れを見渡し、「交換様式」から社会構成体の歴史を見直し、以下の4つの交換様式の変遷として整理する中から、現在の資本＝ネーション＝国家を越える展望を開こうと試みています。

交換様式A: 互酬制(氏族社会)

交換様式B: 略取と再分配(アジア型帝国、古典古代、封建制社会 etc.)

交換様式C: 商品交換(資本主義社会)

交換様式D: バージョンアップした互酬的交換(普遍宗教)

ごく平たく言い直すと、人間がつくる社会において、経済的関係のパターンは、

贈与(贈り、贈られる)、

略取(権力を背景に奪い、再分配する)、

商品交換(お金を介して取引する)

のいずれかになる。

そして商品交換の様式が支配的になり、その齟齬が大きくなった現代社会の先に、互酬的交換がバージョンアップした形態が登場することを予期している、  
という話です。

私たちは今、商品交換様式Cが支配的な社会に生きているわけですが、この本でドキッとするのは、柄谷氏が「資本主義的商品交換のフェーズ」を予期していることです。

産業資本の本質はあくまで、「労働力の商品化」にある(本書 p.319)  
ここにはカールポランニーの悪魔の碾き臼をさらにわかりやすくしている。

土地、資本、労働力(労働ではない)の商品化のうち、土地や資本の商品化は昔からあったが労働力の商品化によって全面的な商品化が可能となる。

万物の商品化とウォーラステインの指摘とも一致する。

「そして信用とは商品交換の困難をとりあえず超える手段」(p319)

信用創造という機能を銀行が持つこと、それは誰かの借金でなければ  
ならないこと。

信用は儂いものである、誰かの借金と誰かの返済能力は労働力商品  
の評価という会計的に非常に困難な人的価値の評価を含んでいるから  
だ。

価値の評価は難しい。

また、恐慌は資本主義の発展に必要なだから起こる暴力的な現象で、失  
敗というより必然であり、必然的に中小の資本家や労働者は淘汰され  
る。320～321

景気循環をもたらすのは労働力商品に固有の性格。

産業資本主義の成長は、つぎの三つの条件を前提としている。

第一に、産業的体制の外に、「自然」が無尽蔵にあるという前提であ  
る。

第二に、資本制経済の外に、「人間的自然」が無尽蔵にあるという前提である。

第三に、技術革新が無限に進むという前提である。

だが、この三つの条件は、1990年以降、急速に失われている。

第一に、中国やインドの産業発展は大規模であるために、資源の払底、自然環境の破壊に帰結する。第二に、中国とインドには世界の農業人口の過半数が存在した。それがなくなることは、新たなプロレタリア＝消費者をもたらす源泉がなくなるということだ。以上二つの事態は、グローバルな資本の自己増殖を不可能とする。

もちろん、資本の終わりは、人間の生産や交換の終わりを意味しない。資本主義的でない生産や交換は可能であるから。

しかし、資本と国家にとって、これは致命的な事態である。

このとき、国家は、何としてでも資本的蓄積の存続をはかるだろう。

そのとき、商品交換様式Cがドミナントである世界は、国家による暴力的な占有、強奪にもとづく世界に退行する。

したがって、資本主義の全般的危機において最も起こりやすいのは、戦争である。

ゆえに、われわれは資本主義経済について考えるとき、国家をつねに  
念頭においておかねばならない

贈与(贈り、贈られる)、

略取(権力を背景に奪い、再分配する)、

商品交換(お金を介して取引する)

**柄谷行人「力と交換様式」を読む 文春新書**

I:著者と読み解く『力と交換様式』

- ・「柄谷行人」ができるまで
- ・『力と交換様式』をめぐって 柄谷行人×國分功一郎×斎藤幸平
- ・モース・ホッブズ・マルクス

II:「思考の深み」へ

- ・可能性としてのアソシエーション、交換様式論の射程
- ・交換様式と「マルクスその可能性の中心」
- ・文学という妖怪

III:柄谷行人『力と交換様式』を読む

・『力と交換様式』を読む

大澤真幸、鹿島茂、佐藤優、東畑開人、渡邊英理

## 柄谷行人さんの新著

力と交換様式／柄谷行人(2022年10月05日 岩波書店)

目次を見ると、最近の講演(「千年王国と現在／Dの研究」等)の内容が盛り込まれており、それらがきれいに整理されている。

かつて柄谷さんは、自著「世界史の構造」について「初めて体系的に書いた」ものだという意味のことをどこかで書いておられましたが、今回の「力と交換様式」は、まさに体系的に書かれた本です。

氏が70年代に中心的な概念として用いていた「交通」という言葉が記されていることにも注目したい。

《人間と自然の間に「交通」を見る視点が消滅したのは、交換様式Cが支配的となったときだといってよい。

それとともに、アニミズムも消えた。

以来、自然は人間にとって、たんに操作される、また操作されるべき物となった。

こうして、人間と自然の「交通」が無視されるようになったのである。

このとき、物神崇拝がアニミズムにとってかわったといってもよい。

(P318)》

《そして、アニミズムがあった頃にはありえなかったような大量生産、大量消費、大量廃棄がまるで望ましいことであるかのように続けられてきた。

その帰結がどんな破壊的なものになるか、明白であるにもかかわらず、人類は資本の力に眩惑されて、そのようなことは目に入らないかのようだ。

度重なる産業革命とともに、過去にあった人間と自然の間の「交通」という観念は消え去ったが、ある意味で、それは人間の生存をおびやかす現実の危機として回帰してきたといえる。(序論)》

「トランスクリティーク」と「世界史の構造」、この二つの大著のあと、そこでカバーしきれなかったいくつかの論点について、自問自答するような著作が何冊か続き(「哲学の起源」「帝国の構造」「憲法の無意識」等)、

それらを整理し直した上でブラッシュアップしたのが、今度の新刊だと思います。

たとえば、超自我の起源に関する論考。欲動の根底には、無機質へと還ろうとする衝迫(タナトス)が存在する。

これが人間の暴力性を発現させるのだが、それはやがて自分自身へと向かう。

タナトスそのものが暴力性を抑制する作用(超自我)となる。

社会的な規範によって(外発的に)暴力性を抑制するのとは異なり、超自我の作用は自分の内側から(内発的に)生じる。

このような概念は、フロイトの後期のテキストにおいて示されているのだが、研究者からは無視されてきた。

柄谷氏はここに光をあてている。

「力と交換様式」あとがきより:

《『世界史の構造』を二〇一〇年に刊行したあと、私はそこでは触れなかった諸問題を扱う仕事をした。

しかし、その後、私はそれらの仕事では十分に論じなかった交換様式Dの問題を、あらためて考えるようになった。

そして、交換様式Dだけでなく、A・B・Cについても再考する必要を感じたのである。

そこで、交換様式A・B・Cがもたらす観念的あるいは霊的な「力」について考えるようになった。

通常、そのような「力」は意識されない。また、マルクスやホッブズのように、部分的にそれを見出した思想家はいたが、それらの異なる「力」の対抗と結託について考えた人はいなかった。

ゆえに、このような仕事を達成するのは、容易ではなかった。

結局、そのために六年もかかってしまったのである。

ただこの間に、世界の事態は、私が予感していたようなものとなった。》

交換様式A: ムラ社会 (義理・同調バイアス)

交換様式B: クニ社会 (義務・ストックホルム症候群)

交換様式C: カネ社会 (債務・貨幣フェティシズム)

これら種々の「力」は、人々の行動にバイアスをかけるに十分なチカラを有するわけですが、では、それらのチカラは何に由来するのか？その答えを見出そうとする人は少ないし、それらのチカラの根っこは非常に見えづらい。

それらを説明するために、柄谷氏は後期フロイト、さらには、エルンスト・ブロッホやカール・バルトを参照するわけですが、ここで躡くかどうか。「交換様式D」を希望の形式として読む上でのカギだと思います。

《われわれが今日見出す環境危機は、気候変動のような問題に還元されるべきではない。

環境危機は人間の社会における交換様式Cの浸透が、同時に人間と自然の関係を変えてしまったことから来る。

それによって、それまで他者として見られていた自然が、たんなる物的対象と化した。

こうして、交換様式から生じた物神が、人間と人間の関係のみならず、人間と自然の関係をも致命的に歪めてしまったのである。

さらにそれが、人間と人間関係を歪めるものとなる。(P318)》

《希望は願望ではない。つまり、人の主観によって招来するものではない。「希望」とは、「中断された未成のもの」が、おのずから回帰することである。(P380)》

かつて(西欧にとっては)未踏の地であった新大陸のように、人類の社会のあり方には未だ見ぬ希望の地が残されている。

それは、狩猟採集民や先住民の生活において実現されていた自由で平等な交換のフォーマットを高次元で回復するものでなければならない。

それは、過去に実現されていたものの反復であるにもかかわらず、「中断され、おしとどめられている未来の道」としてやって来る。

柄谷氏が説く「希望」の描線。

(2023年5月 Google Bard とのやりとりを追加)

Bard: 柄谷行人さんの新著「力と交換様式」は、非常に興味深く、考えさせられる内容でした。特に、交換様式Dが希望の形式であるという考えは、非常に示唆的だと思います。

私たちは、現在、交換様式Cの支配下にある社会に生きています。

交換様式Cは、貨幣によって媒介される交換の形式であり、それは私たちが物事を物質的な価値でのみ評価するように導きます。

このことは、人間と自然の関係だけでなく、人間と人間の関係にも悪影響を及ぼしています。

交換様式Dは、このような交換様式Cとは異なる交換の形式です。

それは、物々交換や贈与によって媒介される交換の形式であり、それは私たちが物事をその本質的な価値で評価するように導きます。

このことは、人間と自然の関係を修復し、人間と人間の関係を改善するのに役立つ可能性があります。

柄谷行人さんの新著「力と交換様式」は、私たちが交換様式について考え直すきっかけを与えてくれる貴重な本だと思います。

この本をきっかけに、私たちがより良い社会を築くための新しいアイデアを生み出せることを願っています。

Westend: 柄谷さんは、後期フロイトの理論を応用し、タナトスが自分自身の攻撃性を攻撃するときに、それが超自我をもたらすと説いていますね。

Bard: はい、柄谷行人は、フロイトの死の本能の理論を応用して、タナトスが自分自身の攻撃性を攻撃するときに超自我が形成されると主張しています。

フロイトによれば、死の本能は生への欲求と対立する本能であり、自己破壊的な行動につながる可能性があります。

柄谷は、タナトスが自分自身の攻撃性を攻撃するときに、超自我が形成され、これは自己規律と道徳的規範につながると主張しています。

柄谷の理論は、フロイトの死の本能の理論に基づいていますが、いくつかの重要な変更が加えられています。

第一に、柄谷はタナトスをより積極的な力として見えています。

彼は、タナトスは単に死への欲求ではなく、自己破壊的な行動につながる可能性があるエネルギー源であると主張しています。

第二に、柄谷は超自我をより複雑な構造として見えています。

彼は、超自我は単に自己規律と道徳的規範の源ではなく、自己破壊的な衝動を抑制するメカニズムでもあると主張しています。

Westend: タナトスと超自我の関係と同様に、ソクラテスとダイモンについても、ダイモンがソクラテスの行動に規範をもたらすものだと、柄谷行人は説いていますね。

Bard: はい、柄谷行人は、後期フロイトの理論を応用して、タナトスと超自我の関係を分析しました。タナトスとは死への衝動であり、超自我とは道徳的規範を内面化したものです。

タナトスは自己破壊的な衝動ですが、同時に自己を律する力でもあります。タナトスが自分自身を攻撃すると、超自我が生まれます。超自我は、タナトスの破壊的な衝動を抑制し、自己を規律する役割を果たします。

柄谷行人は、このタナトスと超自我の関係をソクラテスとダイモンの関係に重ね合わせました。

ダイモンとはソクラテスが常に会話をしていた精霊です。

ダイモンはソクラテスに正しいことをするように促す存在であり、ソクラテスの行動に規範をもたらすものでした。

柄谷行人は、ダイモンはソクラテスの超自我の象徴であると考えています。

柄谷行人のタナトスと超自我、ソクラテスとダイモンの分析は、人間の行動を理解する上で非常に示唆的です。

タナトスと超自我は、人間の行動を支配する二つの根源的な力であり、人間の行動を理解するためには、この二つの力の関係を理解することが重要です

**交換様式ポートフォリオ 4 象限を区切る、自由と平等**

かつて柄谷行人氏は『建築への意志』で、「明瞭なのは、マルクスが「芸術論」を書いたら、言葉の分析から始めただろうという省察にもかかわらず、小林秀雄自身はけっしてそれをやらないだろうということだ」と記された。

柄谷自身は『マルクスその可能性の中心』でマルクスの価値形態論に着目し、その後『トランスクリティーク』、『世界史の構造』、そして本著『力と交換様式』を通じて、世界史を生産様式ではなく交換様式で分析し尽くした。

省察だけで終わるのではなく命がけの飛躍をもって実際に分析したことは、称賛してもきれない大いなる功績である。

岩波書店から本書は「交換様式の最終形」として「呪力(A)、権力(B)、資本の力(C)による、資本＝ネーション＝国家を揚棄する力(D)が明らかに！」と謳われている。

最終形がついに刊行され、早く読みたいという思いとこれは最終と惜しみつつ読了。

以前からの疑問、交換様式Dとは何だろうか、への答えが本書で解明、記述されていると期待した。

個人的には残念ながら交換様式Dを理解するまでには至らなかった。

『世界史の構造』によれば、交換様式ポートフォリオ4象限の縦軸は自由／拘束、横軸は平等／不平等であり、交換様式Dは自由と平等の象限に位置する。

『力と交換様式』で交換様式Dの痕跡について様々に記述されているが、D象限で何と何が交換 (Exchange) されるのか分からなかった。

それは分からないように出来ているのかもしれない。

マルクスが記した諸生産様式の続きは、革命による共産主義(コミュニズム)であり、共産主義が何であるかは具体的には記されなかった。

柄谷は生産様式ではなく交換様式で分析したが、D象限はマルクスに倣えば共産主義に相当する。

使い古された言葉、共産主義とストレートに書くことは憚られたのかもしれない。

D象限は交換 (Exchange) ではないから交換様式Dの表記はなじまないのではなかろうか。

< 交換様式 >                      < 近代の社会構成体 >      < 力 >

A 互酬              ( 贈与と返礼 )      A ネーション              A 呪力

B 略奪と再分配( 支配と保護 )      B 国家                      B 権力

C 商品交換 ( 貨幣と商品 ) C 資本

C 資本の力

D X ( ? ) D X

D 資本=ネーション=国

家を揚棄する力

マルクス『資本論』の価値形態論「単純な、個別的な、または偶然的な価値形態」及び「総体的または拡大せる価値形態」が交換様式Aに、

「一般的価値形態」が交換様式Bに、

「貨幣形態」が交換様式Cに相当する。

マルクスは、交換様式Dに相当する価値形態は記述していない。

かつて柄谷は中上健次氏と『小林秀雄を超えて』という対談を行った。

本書『力と交換様式』で柄谷はマルクスを超えただろうか。

俯瞰すればマルクスの補完ではなかろうか。

マルクスは誤解されたにしても誤解されるように書き(奇しくも柄谷は講演で交換様式Dは誤解されていると『文学界 2022年10月号』)、マルキズムを掲げた共産主義諸国を生み出し、その後、共産主義のメッキは剥げ落ちて独裁主義諸国を現在に残置させた。

マルキシズムの轍を踏まないように、交換様式Dは実在せず実現を目指すべきでもないと言防線を張る。

一方で、ネーション＝国家＝資本(交換様式ABC)の輪が、戦争、環境破壊、経済格差をもたらしたとする。

そこに論証はない。

ネーション＝国家＝資本が無ければ、戦争、環境破壊、経済格差は抑えられたのだろうか。

ネーション＝国家＝資本の代わりとなるものについての考察、思考実験もない。

にも関わらず対抗すべきとする。

ネーション＝国家＝資本の代わりとなるものを描けないまま、共産主義を掲げた結果の独裁主義が、戦争、環境破壊、経済格差をもたらしているのではなかろうか。

ロシア等のように。

柄谷が『世界史の構造』の次に『力と交換様式』を執筆中と発表された際、題名から、これは浅田彰氏『構造と力』(1983年)のパロディではなかろうかといふかった。

40年前を思い起こせば、浅田が紹介したドゥルーズ・ガタリによる「コード化、超コード化、脱コード化」は、「交換様式A、B、C」に相当しそうである。

そして「交換様式B、C、D」は、浅田によるチャート区分「プレモダン、モダン、ポストモダン」にパラフレーズできるかもしれない。

ポストモダンについて描かれた逃走論(=闘争論?! )の、その後は如何か分からないが、D象限を描くのは至難の業に違いない。

D象限に位置する交換様式Dは、完全なる自由かつ平等である。

自由であれ、と命じられることすらなく、あらゆることから解放されて自由になり、万人に等しく向こうからやってくるもの。

それは死である。

人類の死によって、ネーション=国家=資本も無くなり、戦争、環境破壊、経済格差も無くなる。有機は無機に交換される。

タナトスは故あるのである。

完全なる自由と平等は、実在しなかったし、実現されることもない。

なぜなら同語反復になるが、それが理念型であるからである。

自由と平等の積極的な定義が困難であるのは、他人の自由と平等を侵さない限りにおいて、自分の自由と平等がもたらされる構造にある。

社会的関係において生きる人間は、国家＝ネーション＝資本のしがらみがついて回り、個人の意図や意識とは無関係に、その個人が結びつく国家＝ネーション＝資本によって、他人の自由と平等を侵さざるを得ない局面がある。

例えば、ある国の個人が戦争をしたくなくても、その国が戦争をする。

ある商品を購入すると、生産・製造・流通過程で不当な搾取が行われているかもしれない。

完全なる自由と平等である世界共和国は世界同時革命によってもたらされるとする柄谷のビジョンから考えると、他人の自由と平等を侵さないことによってはじめて、自分の自由と平等が、さざ波のように向こうからもたらされる。

まさしく自由と平等が、人々の横つながりでお互いに交換される。

柄谷の交換様式ポートフォリオは、自由と平等を軸として4象限を区切る。

交換様式 A(互酬)は、自由はないが平等はある。

交換様式 B(略奪と再分配)は、自由も平等もない。

交換様式 C(商品交換)は、自由はあるが平等はない。

交換様式 D(X)は、自由も平等もある。

交換様式 A(互酬)は、相手に貰った負い目から貰った物を超える物を返すお返しや、蕩尽にまで至るポトラッチもあり必ずしも平等ではない。

交換様式 B(略奪と再分配)に自由も平等もないだろうか。王は臣下の生殺与奪を握るが、臣下には階級内で限定された自由や平等はあったであろう。

交換様式 C(商品交換)には、自由はあるが平等はないだろうか。等価交換は、互いの物を等価として交換するから平等である。そのことを人間は意識しないがそう行う、とマルクスは表現した。

一方が不等価と思えばその交換は成立しない。交換様式 D の事例として柄谷が選定したのは、狩猟民、遊動民、イオニア、山人、原始共産社会、原始キリスト教社会等。問題は、交換様式 ABCD において交換を行なう各当事者の主観や時代、地域に関係なく、自由と平等の軸を投影していることにある。

柄谷は以前、「形式体系の内部で形式化を徹底させることによって、自己言及の矛盾を露呈させ形式体系の瓦解を図り、外部へ出ること」に取り組んだ。

同じく疑うべきは、交換様式ポートフォリオ 4 象限を区切る自由と平等である。

ビジネス戦略の PPM(プロダクト・ポートフォリオ・マネジメント)は、市場成長率／市場占有率を、縦軸／横軸として4象限を区切り、市場に提供する自社製品やサービスを4象限に配置する。

市場成長率と市場占有率がともに高い象限は、花形(Star)と称される製品やサービスが配置される。

柄谷の交換様式ポートフォリオは、自由／平等を軸に 4 象限を区切る。自由と平等のD象限で交換されるものが、自由と平等であると仮定すれば、PPM に当てはめると、花形(Star)の象限に、製品やサービスではなく市場成長率と市場占有率が配置されることに相当する。

これは、4象限を区切る軸そのものが、一つの象限の中に持ち込まれることになり、自己言及を孕む。交換様式Dの分かりにくさは、柄谷が格闘した自己言及の問題に起因すると思われる。

音の探求者である坂本龍一氏は「シンセサイザーの音を聴くと、聴く前の耳に戻ることはできない」と以前語られたと記憶する。一度耳にした音

は既知となり、新しい音を聴いた経験は蓄積され、経験以前の状態に戻ることはない。

おそらく音に限らず、人はあらゆる経験を蓄積している。

例えば、待ち合わせの人ごみの中から知人を瞬間的に見つけ出せるのも、その知人について蓄積された情報で峻別できるからである。

常に経験しながら情報を蓄積し、同時にそれまでに経験して蓄積された情報と瞬時に照合している。

故に意識しなくても、見慣れた通勤経路は間違わない。

初めて通る路では目を見張り気も張る一方で、時にデジャヴを感じることもある。

死ぬ間際に蓄積された経験である過去が走馬灯のように流れることもあり得るだろう。

人が自由と平等について知ったり経験して不自由や不平等に目覚めた時、不自由や不平等を解消する、自由や平等を獲得する活動を始めたり賛同したり、擁護することは大いにあり得る。

先々、世界に完全なる自由と平等が具現することはないだろうが、自由と平等のことを知れば人々は必ず希求する。それは、自由や平等を否定するもの(A,B,C)の否定であり、自由と平等を求め続ける衝迫(D)である。

それを共産主義やアソシエーションイズムと命名するまでもない。カテゴリーライズさえ食い破る自由と平等。

人類の血塗られた歴史において獲得されて来た自由と平等を、未来へのかがり火とすること。それはロシアによるウクライナへの軍事侵略が止まない現時点においてヴィヴィッドであることは間違いない。

柄谷行人氏流の唯物史観を分かり易く概説した本だと思います。マルクスの『資本論』の中に、現段階の産業資本構造(社会構成体)の下部構造におけるキーコンセプトとして、生産様式だけでなく(多くの学者が見逃していた)交換様式が重要であることを明解に指摘しており、それを織り込んだかたちでこれからの社会変革の道筋を考察しています。

現代の下部構造の動態について、たとえば科学・技術的な部分について、通俗的な解説を基に考察している部分があり、折角の哲学的に鋭い視点が、科学技術論、産業政策論の分野でやや視野を狭くしている欠点も散見されます。中村静治氏が御存命なら、その部分は理解が不足している(あるいは誤解している)と指摘されるでしょうね。

柄谷氏の独自の見方と立場が明晰に示されているユニークで貴重な書籍です。「自由な思考」の典型例で、独自の視点で(通説とは異なる)未知の認知領域を探索する研究者にとって示唆に富む良書だと思います。ただし、交換様式 D について多くを望むと期待外れに終わるかも知れません。未知の領域の開拓は若い世代に委ねられていますね。

1970 年代後半から文芸批評家として活躍し、90 年代後半からはマルクスやカント、ホッブスの読解から「交換」に着目した理論で社会や歴史を読み解いてきた柄谷行人。

その集大成ともいべき『力と交換様式』では、社会システムを

A=贈与と返礼の互酬、

B=支配と保護による略取と再分配、

C=貨幣と商品による商品交換、

D=高次元での A の回復

という 4 つの交換様式によって捉え、とりわけ資本主義=ネーション=国家を揚棄する、人間の意思を超えた「D」の到来をめぐって思考を深めている。

「A の回復としての D は必ず到来する」。

民主主義と資本主義が行き詰まりを見せる混迷の危機の時代、

絶望的な未来に希望はどう宿るのか。その輪郭はどのように素描可能か。

史的唯物論に照らすと

1. A=贈与と返礼の互酬: この交換様式は、比較的初期の社会形態である共同体や部族社会に対応します。こうした社会では、人々のつながりや信頼が贈与と返礼の互酬によって築かれます。結びつきが小規模で密接なものであるため、共同体の維持と発展が重要です。
2. B=支配と保護による略取と再分配: この交換様式は、支配者と被支配者の関係が顕著な階級社会や封建社会に対応します。支配者が支配される者から資源を略取し、再分配することで社会的な秩序を保っています。こうした社会では支配と被支配の対立が中心となります。
3. C=貨幣と商品による商品交換: この交換様式は、近代資本主義社会に特有です。商品交換や市場経済が中心で、個人の自己利益追求が活発です。資本主義の下では、生産の拡大や利潤追求が社会の中心に位置し、経済的発展が進行します。
4. D=高次元での A の回復: この交換様式は、より広いスケールや複雑な社会においても、贈与と返礼の互酬の原則が活用されることを意

味します。これは、大規模で多様な社会が共存し、結びつきを保つために、贈与と返礼の構造が適用されることを指します。

「力と交換様式」では、交換様式を通じて社会の変化を説明しようとしていますが、それぞれの交換様式が特定の歴史的な出来事に直接結びつくわけではありません。代わりに、これらの様式が異なる社会の発展段階や特性に対応し、経済的な要因が社会構造や関係に与える影響を理解しようとしています。

もし特定の歴史的事象に関する詳細な説明が必要であれば、その事象に関連する具体的な歴史的文献や資料を参照することをおすすめします。柄谷行人の理論を歴史的事象に適用する場合も、その理論を基に考察を行うことになるでしょう